αMプロジェクト2023–2024

# 開発の再開発

## Redevelopment of Development

# vol. 4 松平莉奈｜3つの絵手本・10歳の欲

## vol. 4 Rina Matsudaira:
## Three Types of Drawing Instruction Books, the Desire of a Ten-Year-Old

ゲストキュレーター：石川卓磨（美術家・美術批評）
Guest Curator: Takuma Ishikawa (Artist, Art Critic)

2024年1月20日（土）～3月16日（土）
12:30～19:00　日月祝休　入場無料
協力：平和紙業株式会社、株式会社竹尾

アーティストトーク　1月20日（土）18:00～
松平莉奈×石川卓磨

会場：gallery αM
〒162-0843 東京都新宿区市谷田町1-4 武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス 2階
tel：03-5829-9109　fax：03-5829-9166
https://gallery-alpham.com
※2023年度より馬喰町から移転いたしました。電話番号、FAX、Eメールアドレスに変更はございません。

《venus kiss》
2023年｜紙本着色｜130.3×162.0cm

## 「もつれ」を描く

人間が描くすべての絵画は、具象抽象を問わず身振りの痕跡として存在している。画家が描くことは、素材や環境との対話であり、イメージや歴史との対話である。その積み重ねから個人で自己の絵画を確立していく。

しかし、画家も子供の時には、誰かから絵を教わっている。義務教育の図画工作や美術の授業では、絵を描く機会が与えられ、指導や評価を経験する。描く技術の習得とは、先史時代から現代に至る人間の普遍的な欲求の一つだ。子供にとって自主的な試みを評価されたり技術的な向上を実感したりすることは、他では得難い喜びや関心を生み出す。

一方で国家が子供に美術の学習機会を提供することは自明ではない。美術の授業が義務教育から消えることや、学習機会の平等性が失われることもあり得る。義務教育での美術の授業は、単に技術を学ぶだけでなく、理想とされる人間性の育成が目的に含まれている。この人間性のモデルや、美術教育において指導・評価される価値観や感性は普遍的なものではない。それには特定の時代や国家が求める価値観が反映されている。明治以降、近代化を志した戦前の日本の美術教育では、西洋文化の価値や技術を吸収しながら、国家主義や伝統との調和の学習が規律訓練的に組み立てられていた。日本が長期間植民地統治していた朝鮮・台湾・満州での美術教育を見るならば、無害に見える課題であっても、植民地教育の政治的意図が潜在的に含まれていることが示される。

義務教育での美術の授業が成立するためには、子供の描けるようになりたいという普遍的な欲求と、子供に美術の学習機会を提供すべしという国家的要求が、合致しないまでも共振する必要がある。しかしここでは、個人と国家それぞれが成長していく過程として抱く欲望の間に「もつれ」もまた生じ得る。

日本画の技術や歴史を学び実践に結びつけながら、「他者についての想像力」をテーマにしてきた松平莉奈が、明治以降の近代化の過程で形成された日本の美術教育に対し、批判的関心を寄せたことは必然だろう。

これまで松平は「もつれ」を紐と結びつけ、歴史、心理、社会などに生まれている矛盾や複雑性を表現するモチーフとして使用し続けてきた。もつれとは、一般的には絡まり合うことで自己や他者を縛る身動きがとれない状態を想起させるが、彼女が描く「もつれ」は、視覚的にも意味的にも動的な印象を作り出していることに特徴がある。松平にとって「もつれ」とは、ジレンマや葛藤を表現するものでありながら、同時に他者と関係できるネットワークであり、感情の吐露であり、身を隠す障壁であり、ステレオタイプから逸脱するための罠であり、思考するエネルギーそのものであったりする。松平は、新しいフロンティアを求めて拡大する帝国主義的開発を批判し、「もつれ」によって批判的再開発（再ネットワーク化）を試みる。そして、それでも絵画によって目と心を動かそうとすることは、世界の絶望的状況に思考停止せずサバイブする意志と欲望の態度だといえるのではないだろうか。

石川卓磨

# 3つの絵手本・10歳の欲

「誰かを搾取することなしに、楽しく世界を欲望するには？」

絵手本とは近世・近代に出版された、絵のお手本が印刷された本、いわば絵の教科書だ。
人物、動植物、風俗、歴史故事、外国の文物……など内容は多岐に渡り、当時の百科事典的な役割もしていたらしい。
これと筆一本があれば、世界のありとあらゆるものを描くことができる（そしてそのまま懐に収めてしまうことができる）というわけである。
それはきっとすごくワクワクすることだっただろう。
こうした絵手本は明治時代の学校教育にも影響を与え、図画の授業は絵手本の模写が中心だったそうだ。

コロナ禍で美術館も図書館も閉まり、授業もリモートだった 2020 年、私は個展「うつしのならひ　絵描きとデジタルアーカイブ」（ロームシアター京都）を開催した。*
大学などの所蔵機関が公開している絵手本のデジタルアーカイブからリンク集を作り、それぞれ模写してみて、「誰でも、どこからでも」絵を学ぶことのできるモデルを提案する、という趣旨だった。デジタルアーカイブの模写は、端末とネット環境さえ用意すれば誰でも実践可能だ。絵手本もデジタルアーカイブも、どんな人も同じようにアクセスできる点で、画期的で魅力ある媒体だと感じた。
3 年経った今、私自身の「誰でも、どこからでも」という謳い文句をふりかえる。それってあまりに楽観的な気分に根ざしてはいなかっただろうか、と思う。用意した 1 つのシステムに誰も彼も当てはめることができると考える暴力的な面を、見落としていたのではないか？

今回、3 つの絵手本をモチーフに作品を制作した。
1 つは 1932 年（昭和 7 年）に文部省が発行した『尋常小学図画』、1 つは 1937 年に日本統治下の朝鮮で総督府が発行した『初等図画』。どちらも 10 歳前後の子どもたちが使う教科書だ。
もう 1 つは 1852 年にイギリスで出版された絵画指南本、Robert Scott Burn の The Illustrated London Drawing-Book で、のちに改訂版を川上冬崖が翻訳した『西画指南』(1871) は日本の図画教育の起点となっている。
ずれながらも共通する絵柄を模写していると、お手本の線の内に潜む、ある欲が浮かび上がってくる。すなわち、支配欲。
10 歳の子どもが持ちうる欲を腑分けしていく必要があると思う。誰かを搾取することなしに、楽しく世界を欲望するために。

* 専用の Web サイトも作成。「デジタルアーカイブ模写派！　近世近代絵手本デジタルアーカイブを絵手本として利用するサイト」
https://ehonlist.matsudairarina.com/

松平莉奈

●松平莉奈（まつだいら・りな）
1989年兵庫県生まれ。京都府在住。日本画の領域で培われた技術や画材を咀嚼しながら、他者について想像することをひとつの主題とし、人物などを中心とする具象画を制作している。近年の主な個展に「蛮」KAHO GALLERY（京都、2023）、「うつしのならひ　絵描きとデジタルアーカイブ」ロームシアター京都（2020）、「悪報をみる—『日本霊異記』を絵画化する—」KAHO GALLERY（京都、2018）など。主なグループ展に「それを故郷とせよ(手が届く)」TALION GALLERY（東京、2022）、「Slow Culture」京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA（2021）、「ないじぇる共創ラボ展　時の束を披く　古典籍からうまれるアートと翻訳」国文学研究資料館（東京、2021）など。

《鵺の解体》
2017年｜紙本着色｜181.7×227.3cm
撮影: 乃村拓郎

《解毒の作法》
2021年｜紙本着色｜53×72.7cm (20P)
個人蔵

《聖母子》
2022年｜紙本着色｜150×168cm
撮影：乃村拓郎
協力：カトリック玉造教会
天祐寺蔵

## 開発の再開発

現代は、気候変動、感染症、戦争、自然災害、テクノロジーなどによって、永続すると信じられていた日常が大きく変動し、将来の予測が困難な激動の時代となりました。この時代の現象には、ネガティブなものばかりではなく、不平等、差別、暴力を強いてきた社会や構造に抗議し変化を与えていく社会運動も含まれています。ソーシャリー・エンゲイジド・アートやアクティビスト・アートなどは、社会に直接的に関わり、そのような時代に対応したアートだといえます。しかしそのようなアートと社会の関わり方を見ると、そこにはさまざまな障害、温度差、矛盾、認識不足が存在しています。そのため私は、社会に直接関与しようとするアートのアプローチに限定せず、造形的表現や美術史においても、この時代を乗り越えるための新しい認識や方法へのアップデートが重要だと考えています。

「開発の再開発」というタイトルは、以上のような前提に向けられています。そして、開発であれ、再開発であれ、そこではなにかしらの「新しさ」が関わることを意味しています。

しかし、哲学者・美術批評家であるボリス・グロイスが指摘するように、この数十年間アートで「新しいことをするのは不可能である」という言説や認識が広く影響力をもってきました。「アートの終焉」（アーサー・C・ダントー）の言説は、この影響の歴史的な起点になっています。ここでの「終焉」とは、アートという営為自体の終焉を示しているのではなく、「アートの終焉」以後のアートが存続していくことを前提にしています。つまりアートは終わったままこれからもずっと続いていく。そのため「新しいことをするのは不可能である」という悲観的表明は、美術史の重荷や緊張関係から解放されて、アーティストが個々人の表現活動を自由に展開できればいいという楽天的な気分を含んでいます。

では、この激動の時代において、アートは、「新しさの終わり」や「アートの終焉」に留まり続けていていいのでしょうか。冷戦体制崩壊後の時代を象徴する「歴史の終わり」（フランシス・フクヤマ）という歴史認識に、批判的な検討の必要性があるとされているように、「新しさの終わり」という認識から批判的に脱却する必要があるのではないでしょうか。

ただし、これまでのトレンドと差異をつくり出すような新手のトレンドを提示したいわけではありません。なぜならそれは結局トレンドの構造を何も変えることがないからです。むしろ私たちは、これまであまりにも一方向的（過去→現在）な「新しさ」を信じ、限定的な価値基準で「新しさ」を認めてきたのではないでしょうか（アートの新しさとは、作品の様式や美術館の内部だけにあるものなのか）。

「開発の再開発」とは、「新しさ」をつくり出す開発という概念自体を、批判的に再開発する試みです。また、開発は結果ではなく過程であり、実験、研究、調査という行為が不可欠です。再開発は、開発がもつ拡大・拡張の一方向的なベクトルとは異なる時間的・空間的な展開を意味します。本展覧会シリーズの8組のアーティストやコレクティブには、テーマや表現形式に共通性がないとしても、それぞれが歴史や方法に関わる研究・実験的活動やコンセプトをもっています。それを駆動しているのは必ずしも作品や展覧会に成果が集約されないモチベーションかもしれません。展覧会や作品は、結果としてわかりやすく「新しさ」を示さないかもしれません。しかし、この投げかけによって「開発の再開発」とは何かを考える契機が鑑賞者にも生まれるのではないかと考えています。

石川卓磨（美術家・美術批評）

●石川卓磨（いしかわ・たくま）
1979年千葉県生まれ。美術家・美術批評家。芸術・文化の批評、教育、製作などを行う研究組織「蜘蛛と箒」を主宰。近年の主な論考に「パーティーの後で」『中﨑透　フィクション・トラベラー』図録（水戸芸術館現代美術センター、2022）、「寄生し、介入する　旅するリサーチ・ラボラトリー評」『丸亀での現在』図録（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2022）、「アフリカ系アメリカ人として生きる「怯え」と文化的混血性。ラシード・ジョンソン「Plateaus」レビュー」（Tokyo Art Beat、2022）、「特権的な眠り――福永大介「はたらきびと」展」『月刊アートコレクターズ2021年1月号』（生活の友社、2021）など。

■取材、掲載用写真の貸出など、ご質問がございましたら下記までお問い合わせ下さい。■

gallery αM ギャラリーアルファエム
e-mail: alpham@musabi.ac.jp ／ tel：03-5829-9109 ／ fax：03-5829-9166

武蔵野美術大学 大学企画グループ 連携共創チーム（ギャラリー不在時）
tel：042-342-7945 ／ fax：042-342-6087